URP Osaka City University
Newsletter
Issue 52, Aug.2021
大阪市立大学 都市研究プラザ ニューズレター第 52 号 2021 年 8 月

大阪市立大学先端的都市研究拠点「共同利用事業・共同研究公募」2021 年度採択課題

Results of the Platform for Leading-Edge Urban Studies' "Joint Usage / Research Public Offering"

都市研究プラザでは、2014 年度より文部科学大臣の認定を受ける共同利用・共同研究拠点「先端的都市研究拠点」として、他の研究機関の研究者や NGO／NPO 等の現場ワーカーなどとともに共同研究を推進してきた。

2021 年度は 6 件を採択した。研究テーマならびに内容は、以下のとおりである（順不同）。

1）外国人労働者の自立生活を支える社会的連帯ネットワーク―コミュニティハブ概念を中心に

日本では、特定技能 1 号及び 2 号という新たな在留資格ができたことにより、外国人労働者が日本に永住することも可能となった。しかし、こうした新たな資格を通じて、外国人労働者の地域受け入れの仕方やこれから住民として自立的に暮らしていく住環境の社会的整備が課題となっており、現時点ではいくつか実験的なイニシアティブがみられる程度にとどまるこうした課題に加えて、コロナウイルス感染症拡大による日本の経済への大打撃の結果、解雇や強制的に帰国させられる不安に直面している外国人労働者も増えている。本研究は、外国人労働者に対するサポートネットワークに着目し、住環境の改善または自立生活を可能にする社会的整備への取り組みを分析することが目的である。そのために、外国人労働者が地域社会に包摂され、地域社会のメンバーとして定着していくプロセスや、そこに作用する定着促進要因・阻害要因を、大都市と郊外都市の双方を視野に入れて、「行政」、「NPO」、「受け入れ企業」という三つのステークホルダーへの聞き取り調査によって明らかにする。得られた知見は、地域社会での自立生活をサポートする「コミュニティハブ」という概念を用いて分析し、包摂メカニズムとして理論化していく。

（コルナトウスキ ヒェラルド：
九州大学大学院比較社会文化研究院）

2）フォーマルとインフォーマルの力学から都市コモンズを問い直す：ヨーロッパと東アジアの生活困窮者支援の現場から

本研究は、インナーシティに構築されたサービスハブを対象にし、生活困窮者支援にめぐるフォーマルとインフォールの力学を分析するものである。この視野から、東アジアとヨーロッパの事例を比較することで、パンデミックの普及による生まれた新たな都市コモンズの可能性を検討していきたい。

インフォーマルはフォーマルな制度の「外」にあるものより、フォーマルな制度によって生み出され、フォーマルな制度と密接に関連しているものとする。しかし、フォーマルな権利と違い、インフォーマルな実践は法律などで守られた権利ではない。交換権には統一性も安定性もなく、利用権のみが成立されているという特徴がある。生活困窮者を持続的に維持できる都市コモンズという資源を市場と行政・公的機関外で管理されている仕組みとしてサービスハブを事例にし、フォーマルとインフォーマルの力学を検討することである。

パンデミックを含む生活困窮者支援についての研究の最前線に立つ東アジアとヨーロッパの専門家を招聘し、都市研究プラザの連続ウェビナーを企画する予定である。国際比較という目的で、専門家との積極的な情報交換を行い、都市コモンズに関する課題と知識を深めることに目指す。

（ヨハネス・キーナー：埼玉大学人文社会科学研究科）

3）上方・大阪都市文化の研究拠点形成―大学アーカイブの整備と発信―

本研究は、大阪市立大学と大阪府立大学がそれぞれ所蔵する、また今年度新たに収蔵予定の上方・大阪文化にかかわる貴重なコレクションについて、大学統合に先駆けて整備に着手し、研究利用・地域開放のための整備公開や、デジタル整備を進めていくものである。この営為は、大学アーカイブの価値の認知を広めるという点で、大変意義のあることである。

両大学統合の 3 年後に、市大文学研究科は、大阪城という文化的・歴史的表象に臨む森之宮に開かれる新キャンパスに移る。大阪城は上方文化において、人気の高い〈太閤記もの〉の舞台でありシンボルでもある。折しも同研究科では、数万点の講談資料コレクションの受贈計画が進んでいる。文楽・歌舞伎・落語・講談等の演劇・大衆演芸に代表される上方文化の研究とそのための大規模な環境整備は、キャンパス移転が持つ都市文化的意義を最大限に増幅できる一大事業と言える。そのための共同研究体制を、都市研究プラザの研究拠点にて展開するものである。

市大恒藤記念室が所蔵する、初代学長・恒藤恭の思想形成をたどることのできる資料約 4 千点や、都市研究プラザが有する上田貞治郎写真コレクションをはじめとする都市景観写真もあわせて、デジタル整備や、すでに整備されているものは一般公開に向けての準備に着手する。

（西田正宏：大阪府立大学人間社会システム科学研究科）

4）地域共同のまちづくりによる社会的不利地域の再生に向けたアクションリサーチ

本研究は、大阪市内の被差別部落である浅香・加島・矢田の 3 地区共同によるまちづくり研究会を母体として 2016 年 11 月に設立された 3 地区まちづくり合同会社 AKY インクルーシブコミュニティ研究所が主体となって実施するアクションリサーチによって構成される。近年 3 地区では隣保館をはじめとした同和対策関連施設の廃止や施設用地の民間売却により、地域の環境や住民構成が急激に変容する中、コミュニティ空間を取り巻く新たな課題も表出してきており、これらに対応するための具体的なアクションプランの早急な立案と実践が求められている。

今年度はまず、浅香・加島・矢田地区と同様の課題を抱えている近隣地区にも呼びかけ、「まちづくり研究会」の再構築を行う。研究会では、各地区の課題や現状を共有しながら、共通する課題を抽出し、先進事例の視察や有識者との意見交換を通して課題解決に向けた中長期的なアクションプランを導き出すことを目指す。アクションプランの立案に際しては、課題やニーズの詳細な把握を目的とした共同調査を実施するとともに、調査結果の共有や意見交換を目的としたワークショップを開催する。なお、本研究は研究者・地域のまちづくり関係者・地域住民、そして地域行政が共同で参画するアクションリサーチの手法を用いて展開することにより、一連のプロセスが地域やコミュニティの再生に寄与するような形で実施する点が特徴的である。

（住吉輝彌：AKY インクルーシブコミュニティ研究所）

5）紀伊半島における開発、災害の地域誌と地域の福利増進のための実践的研究

都市から地方の広域的な地域研究は本学においてますます重要な取り組み課題となる。その中でも和歌山県が存する、大阪府の後背地にあたる紀伊半島との人とモノの交流の歴史は長い。世界遺産に代表される自然環境や歴史遺産の中、多様な一次産品の生産から中山間地域での様々な生活、近い将来に発生が懸念される南海トラフ地震を中心とした災害との対峙など、国内外との様々な交流・往還の歴史と地理がつまっている。

本研究では、本研究チームが 10 数年以上にわたって展開してきた和歌山県をフィールドにした地誌的研究、実践的研究および教育の蓄積を以下の 4 つのアプローチから活字化し、より多くの市民に共有する。①地域誌に関する地理情報の編纂や、地域を紐解く場合の地域へのアプローチの仕方の共有、これまでの和歌山県庁との共同研究成果の共有が含まれる。②教育プログラム（特に副専攻の COC から COC+までの取り組み）のプロセスを含めた公開、③高齢化がすすみ、沿岸部に交通路が走り，急峻な山間部の道路は整備が十分ではない紀伊半島の災害対応の追究、④そして林業あるいは特用林産物を利用した産業の可能性を福祉や福利の増進を展開するという林福連携の取り組みであり、空き家の活用、「森林」が生み出す資源利用、そして地域力を増進する取り組みから構成される。

本研究のアウトカムは、都市研究プラザの来年度以降の新しい展開、特に防災関連の研究教育との合同において、先行的な研究・教育事例ともなる。

（菅野拓：大阪市立大学文学研究科）

6）東アジアインクルーシブ都市ネットワークの構築に向けた都市間の経験交流

「包摂都市ネットワーク・ジャパン(ICN-Japan)」は 2018 年の発足以来、東アジア諸都市との経験交流を図り、東アジアにおける包摂都市ネットワークの構築に向けて取り組んできた。今年度も昨年度に引き続き都市間ネットワークの形成に資する諸事業を展開することを予定している。

まず、都市行政ネットワークウェビナーの連続開催により自治体行政や民間支援団体による先進事例の共有や国内都市間のネットワークづくりを進める。そして、貧困や社会的包摂をテーマとしつつ、東アジア地域研究に携わる研究者による研究会を開催し、インクルーシブな都市づくりにかかわる研究交流やアクションリサーチャーの育成を目指す。また、2021 年 8 月 19 日～20 日に予定している「東アジア包摂都市ネットワーク(EA-ICN)」の構築に向けたワークショップ@ソウル(オンライン開催)への参加を通じて東アジア都市間の経験交流を進め、その知見をまとめて国内での実践共有の回路を設ける。さらに今年度は、会員による自主研究の発信や活動情報の交換の媒体として年刊誌を発行するとともに、ML や SNS を活用した情報共有、URP ブックレットの配布、ウェビナー等での報告機会の提供等により、組織体制の整備も進める。

（網中孝幸：包摂都市ネットワーク・ジャパン）

At the Urban Research Plaza the Joint Usage / Research Platform “Platform for Leading-Edge Urban Studies”, accredited by the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology, is since 2014 promoting collaborative research, that involves researchers from other research facilities or members of NGO/NPOs. In 2021, six research projects have been accepted.

先端的都市特別研究員（若手）の研究について
Introduction of the URP Special Researchers (Young, Leading Edge Urban Studies)

都市研究プラザに 2021 年度より加わった若手研究者の研究内容等について紹介する（順不同）。

Urban Research Plaza dedicates itself to educate young researchers, through the recruitment of Special Researchers on an international scale, with the aim of supporting autonomous research activities with international standard. From 2021, two young researchers are newly enrolled in this program.

■藤原牧子

大阪市立大学大学院生活科学研究科後期博士課程の藤原牧子と申します。これまで、現代の乳幼児教育のあり方を再考するために、わが国の乳幼児保育施設が創設された明治・大正期に遡り歴史研究をおこなってきました。大正期、神戸に開設されていた善隣幼稚園は、子どもの保育のみならず周辺地域の拠点となり、地域住民への保健衛生教育も行っていました。その結果、地域住民のつながりは強くなり、神戸市周辺でコレラが流行した時、地域住民は感染を免れています。今の保育施設にはそのような役割は求められてはいませんが、家庭の養育力の低下や子どもの発達など多様に表面化している子育て家庭の課題に対して可能な限り対応や支援をしています。しかし、現状において保育施設だけでは十分とはいえないため、地域と子育て家庭がつながり、親しい関係ができることで子育て家庭の抱える課題が軽減するのではないかと考えます。現在、地域が子育て家庭にできることは何かを探るために、乳幼児を持つ母親の実態を調査し、その中でソーシャル・サポートを持たない母親が、妊娠から現在までどのような子育て観を持ってきたのか、また、その子育て観を持つに至った要因を明らかにしていくことに取り組んでいます。それによって、地域でできるソーシャル・サポートを持たない母親への具体的な支援が見えてくると考えています。

■小谷真千代

神戸大学大学院人文学研究科博士課程の小谷真千代と申します。わたしの研究関心は、都市空間の拡大過程において労働力供給業がいかなる役割を果たすのか、ということにあります。具体的には派遣会社や請負業者、手配師などと呼ばれる労働市場の仲介業者たちが、大都市の脱工業化―地方の工業化/都市化という文脈において労働力を移動/固定させる仕組みを生みだす過程を、神戸、岐阜、サンパウロを対象に研究してきました。都市研究プラザでは、特に在日ブラジル人労働者の移住産業に焦点をあて、仲介業者がどのように移住に関する知識を生みだすのかを検討したいと思っています。もともとは「多文化共生」に関心をもって研究を開始したはずでしたが、ボランティアや日本語学校などの場で移民たちをとりまく問題に直面したとき、その背景にはつねに不安定な就労の問題があり、さらにそれは外国にルーツを持つ人びとだけではなく、日本列島を移動する多くの労働者たちの置かれてきた状況とつながっているのではないか、と感じたことから現在の研究テーマに至りました。移動する人たち、から少し視点をずらして、移動を可能にする仕組み、という観点から取り組んでいきたいと考えています。どうぞよろしくお願いします。

『都市と社会』第6号（2022年3月発刊予定）投稿募集中！

本誌は、都市問題の研究にかんする知識の共有をはかることを目的とした URP 発行の紀要です。都市問題に関心のある人、本誌の趣旨に賛同する人でしたら、どなたでも投稿可能です。詳しくは、下記リンク先の投稿規定ならびに執筆要領をご参照ください。

https://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/publications-and-archives/journal/

投稿締め切り：**2021 年 11 月 15 日（月）**（厳守）

問い合わせ・原稿提出先： toshi_henshu@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

都市創造性コラム 15　Column for Urban Creativity 15
地域文化を仕込む（編集する）オープンスペースとしてのビール：琵琶湖の創造性をいかに「発酵」・「熟成」させるか
Beer as a Open Space that edits local culture: How to "mature or ferment" the creativity of Lake Biwa

近江麦酒(株)の設立の動機: A case of Omi Beer, Co.

「ビールにボディ[1]がある、華やかな香りがある！」クラフトビールを初めて飲んだ時の驚きが、ビール造りを一から学び開業するに至った原動力だ。酒税法改正の時期でもあり、その驚きの日から開業まで僅か２年程度であった。2018 年春、酒造免許等の準備が完了し、「おもしろ美味しい」をテーマに醸造を開始。秋にはわれわれのスタンスを表した「鮒 BEE」が完成した。これは野洲市役所から「野洲市の地ビールを作りたい」と相談を受け誕生したもので、滋賀県の郷土料理「鮒ずし」を原料に使い、地域性と意外性の両方を追及した。一度に造る量は最小規模の 120 リットルで、小回りの良さを活かし、近江富士いちご、レモン、梨、むべ、葡萄、米麹、こしあぶら、瀬田しじみなど、地元食材を使ったビールを仕込んだ。少量生産である反面、仕込み回数が多く、醸造データや経験値の蓄積スピードは他社に比べメリットがある。クラフトビールを通じて近江の魅力を発信したい。以上は「湖国の郷」（滋賀県大津市堅田）の近江麦酒・代表の山下友大氏による文章である。今回は、地域の創造性とビール醸造との関係性について考えたい。

琵琶湖の魅力とその「文化編集」 The charm of Lake Biwa and its "cultural editing"

「鮒 BEE」は「黒」と「白」の２種類ある。「黒」は鮒ずしの身の部分を使い、モルトのコクと鮒ずしの旨味を感じさせるのに対し、「白」は 飯（いい）を使用し、鮒ずしとホップの香りをマッチさせるという。藤岡(2017『再考ふなずしの歴史』所収)によれば、鮒ずしの仕込み樽の「水替え」を定期的に行うことで、塩分と乳酸菌や酵母菌による発酵のコントロールできるという。筆者による大津市堅田の調査では、逆に「水替え」をしないほうが美味しくなるという。堅田の知恵をビール醸造のプロセスでいかに組み込むかを地元の方々と話し合うこともいいかもしれない。近江麦酒では今年の３月からビール醸造を伝授する短期コースがスタートし、筆者もその「ゼロ期生」に加えていただき、「麦雫」と関した（最澄の）日吉茶ビールおよび柿渋ビール[2]を仕込んだ。こうした場を地域の方々との交流に生かすのもいい。ビールが地域文化を編集する。

茶ビールといえば、近江麦酒の茶麹ビールを初めて飲んだ時に感動した。滋賀の政所茶を使った味わい深いもので、その後、政所茶の郷に通い、茶の木が辿ってきた道を思い描きながら、茶と麦との民俗誌的調査を進めている（News Letter 47)。信楽の茶ビール「ほととぎす」が滋賀の朝宮茶ビールの元祖であった。例年７月 18 日には総社神社（甲賀市水口）で

堅田の近江麦酒のラボ

日本唯一の「麦酒祭」が開かれる。水よりも衛生的で栄養価の高い「液体のパン」＝ビールのコアの部分が冒頭の「ボディ」であろう。ビール単体が「食事」であるという西洋の伝統が欠けていたわが国でも、近年は選択の幅が広がりつつある。クラフトビールは創造性のオープンスペースとして（再）編集できよう（岡野 2021『都市と社会』5 号)。

1 ビールの「ボディ」とは飲む際に感じるコクを表し、高アルコール、モルトの甘みが強いビール、タンパク質が多いビールなどを「フルボディ」と表現することが多い。

2 柿渋がコロナウィルスに有効なことは最近の奈良県立大学の研究による。ホップのイソアルファ酸が認知症に効果があることはキリンビールの研究者・阿野氏の研究を参照。

■岡野浩（URP 教授、経営学研究科併任教授）
Hiroshi OKANO *City, Culture and Society* (Elsevier)名誉編集長
Creativity, Heritage and the City (Springer)編集長

URP
Osaka City University 大阪市立大学 | Urban Research Plaza 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、都市再生へのチャレンジとして大阪市立大学が 2006 年４月に設立した全く新しいタイプの研究教育組織です。「プラザ」という名前が示すように、都市をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。先端的都市研究拠点として、現場や海外での研究・まちづくり活動、さらに、世界第一線級の研究者や政策家と国際的なネットワークを構築しています。

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138　tel.06-6605-2071
e-mail：office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp
所長 阿部昌樹　副所長 全泓奎 松本正三

大阪市立大学都市研究プラザ　ニューズレター　第 52 号
編集長（発行責任者）阿部昌樹
副編集長　全泓奎　水内俊雄　岡野浩
編集主幹　鄭栄鎭　小嶋尚実

https://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp